

由来から探る  
コートを着る意味

「コートは  
男の紋章。  
覚悟を持って  
着るべきです」



綿谷 寛さん（以下画伯） 今日の中野先生から直にコートの講義を受けるつもりで来ました。部屋の夜景も綺麗ですし、まずは泡で乾杯といきますか？

中野香織さん（以下先生） 対談ですから、ちゃんと画伯も話してくださいよ。でもまあ……乾杯は賛成です（笑）。

画伯 そもそも服飾史でコートはいつ頃から登場するんですか？ 人類が毛皮を纏っていた時代まで遡るとキリがないので、紳士の服飾史限定で（笑）。

先生 コートは英語の「覆うもの」(Coat) から来ており、服飾史で最初に現れるのは5〜6世紀頃の「Coat of Mail」。これは日本でいうと鎧兜子（くさりかたびら）です。

画伯 防寒具ではなく、身体を覆って守るものがコートの始まりなわけか。

先生 さらに歴史が下って中世になると「Coat of Arms」と呼ばれるものが生まれます。直訳すれば、武器の覆い。で、当時の貴族が馬や武器にかぶせた色柄付きの覆いのこと。それによりこの家の所属を示したんです。紋章の起源になりますね。

画伯 当時は馬も武器だからね。で、紳士の外套としてのコートが出てくるのはいつ頃なんでしょうか？

先生 18世紀です。といってもこの頃

男にとってコートとは何かを考える

## 綿谷画伯と中野先生の “粋なコート”今昔物語

アウター特集の掉尾を飾るべく、綿谷 寛画伯と中野香織先生による男のコートをめぐるスペシャル対談をお届け。その歴史から粋な着こなし方まで、メンズファッションに造詣の深いお二人がディープに語り合ってくれました。

服飾史家

中野香織さん（右）

株式会社Kaori Nakano代表取締役。服飾史家として研究・講演のほか企業の顧問教授を務める。新聞・雑誌・WEBなど多媒体で執筆。

イラストレーター

綿谷 寛さん（左）

雑誌連載でお馴染み。50年代アメリカンイラストレーションを特徴とさせる写実面が知られ、中野先生とともにイベントを行うことも。



はテールロードの技術が未熟で、袖なしの外套、いわゆるケープが今に続くメンズコートの原型です。上流階級の間で流行し、ケープをちゃんとして纏えてこそ一人前の紳士と見なされました。この頃から外套に意味や象徴性が加わってきます。このケープを足元まで届く着丈としたものがクローク。英国では今もオペラ観劇時にオペラクロークを羽織るお洒落な方がいらつしやいますし、海軍も式典の際にロイヤルネイビーポートクロークを着用しますね。

画伯 形としてはマントも似ていますよね？ 両者の違いはあるんですか？

先生 マントはクロークのフランス語で、まったく同じものを指しています。

画伯 今日のは勉強になるなあ（笑）。先生 19世紀になってようやく袖付きの上着として、外套であるオーバーコートとその下に着るアンダーコートの2種が生まれます。前者には毛皮などを使った重たいコートと軽く着用できるトップコートがあり、後者はモーニングコートやテールコートが有名。ちなみに英国ではフォーマルな場で着るすべての上着をコートと呼びますね。

画伯 たしかに。我々がテールロードジャケットと認識しているのもスポートコートと呼んだりするものね。

先生 ジャケットはJack（農民）が語源で、ブルゾンなどのもつとカジュアルな上着を指します。ケープから袖付きのコートに発展していく過程を経て、コート&タイの装いが紳士の象徴になっていったんですね。

画伯 ところで現代のコートにはミリタリー起源のものも多いですよ。こういう軍用コートはいつ頃誕生？

先生 軍制服として登場するのは、これも19世紀。陸軍はシングルブレストッド、海軍は洋上での防寒性を高めるためにダブルのコートを着用しました。

画伯 海軍はダブルは、風の向きで前の合わせを変えたからって話も聞かぬ。

先生 軍由来の代表的なコートは威厳を示すためかっちりとしたデザインのものも多く、ロシアの国境警備隊が今も着用するグレートコートが有名ですね。ヘビいなウールを用いた丈が長いのが特徴的。そして実は、こういうヒストリカルなメンズコートってほとんど19世紀に生まれているんです。フロックコートの上に着るフロックオーバーコート、ケープが付いたウルスタールコート、ジェントルマンが馬を調教する



Coat of Mail  
(鎖帷子)  
5~6世紀頃



Coat of Arms  
(紋章) 中世



Cape 18世紀



Cloak  
(フルングス)



Overcoat  
19世紀

中野香織先生

コートは男のスライタスや  
人となりを映す鏡なんです  
いままでも安易に選んで  
いたかも。  
これからは慎重に選ぶほうと

あう画伯気の利いたこと  
すきじゃない。いつ  
そんかんと覚えたの(笑)

アオレ



スタンカラー  
Collarが  
語源からすると  
跳たもので、  
襟を倒して着るのが  
正しいの。知ってた?

エッ!?

意外と知らない  
コート(人)



着る物もX

帽子だけがばうって  
傘をささないのが  
トレンチコートの粋!



囲い地で着たパドックコート、そして今最もよく着られている社交用のチェスターフィールドコート……。

**圓伯** こうして歴史を伺うと、コートは男としての象徴や威厳を示すものとして発展してきたことがわかりますね。

**先生** 男にとって大切なものですから、コート自身が着る人の象徴として扱われる表現も多いんです。「Dustone's coat (コートの埃をはらう)」はその人を語る、の英国的な婉曲表現、「Turnone's coat (コートをひっくり返す)」は、憂鬱する。Weather the king's coat は、兵士になる、という意味です。

**圓伯** そういうことを踏まえると、ゆめゆめいい加減に選べませんね。男としての覚悟を持って臨まないと。

**先生** 先ほどの話じゃないですが、コートはやっぱり男の紋章なんですよ。

## 第2章

### 粋なコート姿とその着こなし

「コートによって句の年齢がある。

トレンチは働き盛りが最も似合う」



**圓伯** ポピュラーなコートはその種類ごとにスタイルアイコンがありますよね。

**先生** 有名どころで言うと、映画「カサブランカ」のハンフリー・ボガードのトレンチ姿でしょうか。ちなみにトレンチは20世紀初頭に塹壕戦用の防水外套として生まれたもので……って、

もう歴史の話はいいですね(笑)。ただ彼がミリタリアウターのトレンチを着着へたと広めたのは間違いありません。

**圓伯** ボギーはトレンチのウエストベルトを前で無造作に蝶結びして、ドロップを強調して着ていた。あのベルトを後ろで結んでる人を見かけるけれど、みっともないからやめてほしい(笑)。

**先生** ボギーはトレンチを着る際、帽子だけかぶって傘を持ちません。あと巻き物もしない。軍服を出しとするトレンチらしい着こなしですが、その潔さがとても粋。そのフレンチ流の着こなしが「サムライ」のアラン・ドロン。

**圓伯** 襟を立てて、前ボタンを全部閉じて着ているんだよね。あのストイックさは真似するべき。かくいう僕はトレンチを一度も着たことがありませんが。

**先生** それはまたどうして？

**圓伯** 若いうちにまだ自分には早いなと思っていたら、時期を逸してしまっただ。やっぱりコートには似合う句の年齢があると思うんです。トレンチは40〜50代の働き盛りが一番似合う。今ボクが着ると哀愁が漂いすぎて(笑)。

**先生** 今着てもお似合いだと思いますよ。でも若い頃に無理して着てもよかつたのでは？ コートは着ているうちにその人に馴染んでいきますから。

**圓伯** 一方トレンチと並ぶビジネスマンの定番コートであるステンカラーのアイコンといえは……。「パリの恋人」のフレッド・アステアや「ティファニーで朝食を」のジョージ・ペバードかな。前者はカメラマン役で、後者は作家役。

50〜60年代はクリエイター系の人々が着るモダンなコートだったのかもしれないね。「刑事コロンボ」以降、オッサンのよれよれコートのイメージも若干

ついでしてしまいましたが。

**先生** 一応言っておきますと、ステンカラーは正しくはバルマカーンコート。ステンカラーは「Stand fairer」が訛つたもので、この語源から行くと襟を倒して着るのが正式。ニュアンスを出そうと襟を立てて着る人も多いですが。

**圓伯** え、僕もたまに立ててるよ(笑)。

**先生** でもあまり原則にこだわらず、わかった上でのハズシならいいのかもしれない。あのジャン・コクトーなんて、タキシードに白いダツフルコートでパーティーに現れたことがありますが。このセンス、薄れませんか？

**圓伯** ハズシなんて概念のない時代だから、さぞ衝撃だったろうね。よっぽど自分に自信がないとヤケドしそう。そういうミスマッチ的な着こなしでいうとバブアーのほうが簡単ですよ。ね。狩猟や乗馬などのカントリーサイドが発祥ながらどこか品があり、昔からドレススタイルにも羽織られてきた。

**先生** 英国王室の方々もそんな着こなしをしていますからね。米国のスノッブなお金持ちの間でも、タキシードにバブアーを羽織るのが流行りました。

**圓伯** でもやっぱりちゃんとした場にはウールのコートを着ていくべきかな。

**先生** そういう意味ではチエスタフールドコートが一番間違いないかも。そしてそのチエスタフールドコートといえはやっぱりチャールズ皇太子。あの方はサヴィル・ロウの名店、アンダーソン&シエパードで仕立てたコートが30年以上着ています。あの、いいものを長く大切に着続ける、というスタンスはとっても英国らしいものです。ジェントルマンを目指すすべての人に

着られる気がしなくて

トレンチは  
買わなかったな〜



着続ければ  
様になりますよ

見習ってほしいです。

**圓伯** 同店の顧客という日本人の方から聞いたことがあるんですが、コートを初めて仕立てたとき、店の人から「これで貴方はうちの本当の顧客ですね」と言われたんですって。スーツだけ仕立てているうちはまだ顧客じゃないんですよ。スーツに合わせてコートまで仕立てて初めて認められる。つまり、男のスタイルはコートがなければ完成しないって話。

**先生** そういう名店でオーダーするのはともかく、コートは長年着続けるものですし、男のステイタスや人となりを映す鏡ですから、やはりそれなりのものを選びべきでしょうね。

**圓伯** 自信を持って着続けること、それが粋なコート姿の秘訣ですかね。

……って、

Jean Cocteau

Humphrey Bogart

Prince  
of Wales



Fred  
Astaire